

瀬戸内地域の発展と橋梁技術の 課題解決に貢献します

瀬戸内地域に立脚する企業としての責任を果たすため、国、地方公共団体、大学、企業、地域に根ざす各種団体など、多様なパートナーとの連携を強化し、インフラツアラーや次世代につなぐSA・PAの進化、文化芸術の発展などに取り組み、瀬戸内地域の活性化や地域課題を解決することで、本州四国間の交流人口の拡大を目指します。

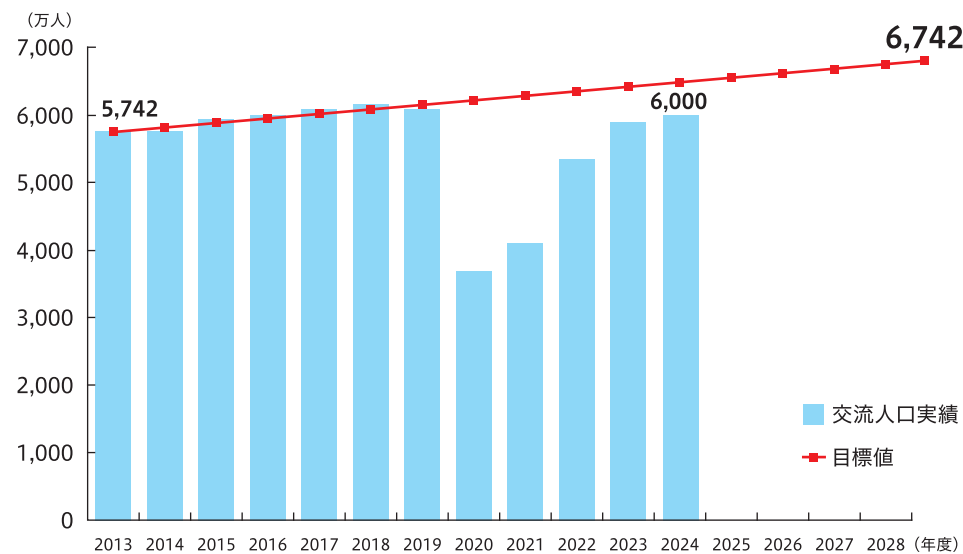
また、橋梁技術のフロントランナーとして、本四連絡橋の建設・維持管理で培った技術・ノウハウで、国内外の長大橋等の課題解決に貢献しています。

瀬戸内地域の長期発展に向けた取組

交流人口増加への取組

当社は瀬戸内地域を含む環瀬戸内海地域の国、地方公共団体、経済団体等で構成される「環瀬戸内海地域交流促進協議会」に加盟しており、同協議会が掲げる2028年度の目標交流人口6,742万人（2013年度比1,000万人増）を目指しています。

環瀬戸内海地域交流
促進協議会について
詳しくはこちら



本州四国間の交流人口の目標

(出典:環瀬戸内海地域交流促進協議会の公表資料を加工)

観光事業者との連携

瀬戸内地域における大規模国際イベントなどの活用によるインバウンド需要の取り込みや、瀬戸内地域の広域周遊の活性化を目指した「せとうち魅力発見会議」の開催などにより、国、地方公共団体、経済団体、観光事業者などと連携した交流促進に積極的に取り組んでいます。四国ツーリズム創造機構との連携においては、「しこくーる」と「四国巡りんく」の相互リンク掲載を行うなど、情報発信に取り組んでいます。



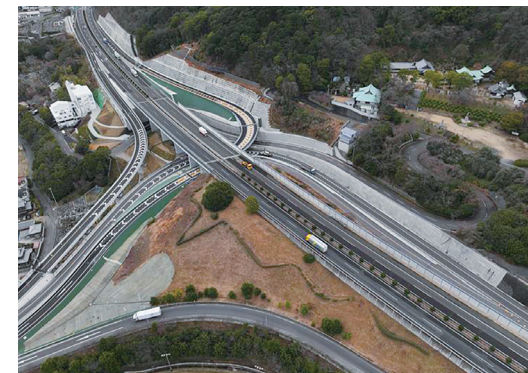
一般社団法人四国ツーリズム創造機構
事業推進本部 マーケティングチームマネジャー
竹内 里見

会議を通じて多様な団体の方々と意見を交わし、新しいつながりができたことは本当に大きな収穫でした。この出会いを一回限りの場にせず、今後も継続してアイデアを出し合いながら、広域での魅力発信や誘客促進につなげていきたいと考えています。地域の枠を超えた強いチームワークで連携を深め、国内外問わず、旅の目的地として四国を選んでもらえるよう、これからの誘客をさらに盛り上げていきます！

地域のニーズに対応した交流促進

インターチェンジ整備による地域貢献

瀬戸中央自動車道「坂出北インターチェンジ」四国方面出入口は、2017年7月の事業化以降、香川県および坂出市と連携して整備を進め、約8年8か月の工事期間を経て、2026年3月20日に開通しました。本事業は、これまで本州方面のみの出入口（ハーフIC）であった坂出北インターチェンジに、新たに四国方面の出入口を整備（フルIC化）したものであり、これにより四国横断自動車道へのアクセス性が一層向上しました。



坂出北インターチェンジフル化事業 完成状況



開通式の様子

瀬戸中央道 坂出北IC 四国方面出入口開通に寄せて

坂出北ICの四国方面出入口開通にあたり、関係機関並びに工事関係者の皆様のご尽力に深く感謝申し上げます。2026年3月20日の供用開始により、本市の交通結節機能は一層強化され、産業・物流の効率化や観光振興に加え、災害時の広域連携にも大きく寄与するものと期待しております。今後もフル化した坂出北ICを核とした地域活性化に全力で取り組んでまいります。



坂出市長
有田 哲二

地方公共団体からの受託事業

兵庫県および徳島県から受託する大鳴門橋桁下空間への自転車道設置工事や地方公共団体が管理する本四高速道路上の跨道橋の点検、補修や耐震補強工事等、地方公共団体からの受託要請に協力し、地域に貢献します。



自転車道（イメージ）
出典：「大鳴門橋自転車道」PRムービー（徳島県）



跨道橋の点検

次世代につなぐSA・PAへの成長

SA・PAについて
詳しくはこちら



子育て世代や高齢の方、障がいのある方をはじめとする多様な立場の高速道路のお客様、そして地域の皆様に必要とされ、活用いただけるSA・PAに成長するため、休憩施設・商業施設の機能充実や施設の脱炭素化を進め、施設利用者増、顧客満足度の向上、売上向上を目指します。これまでJB本四高速グループが積み重ねてきた、国、地方公共団体、大学など、多様なパートナーとの連携の取組を次のステージに高め、新たな地域共創を実現するとともに、ロケーションを活かした機能向上を図ることで、次世代につなぐ新しいSA・PAに成長します。

商業施設としての機能向上

淡路SA（下り）ミスドオープン

2026年2月、淡路SA（下り）に全国のSA・PA初となる独立型店舗『ミスタードーナツ淡路SA（下り線）ショップ』がオープンしました。明石海峡大橋を望む好立地に、観覧車や展望エリアと連携した新たな『たまり空間』を創出。SNS等での話題化も実り、初日売上は全国1位を記録しました。回遊性と滞在価値を高め、「つい長く滞在したくなるサービスエリア」として更なる商業価値最大化を推進します。



オープニング式典

イベントによる地域活性化

せとうち島旅フェス2026@与島PA

2026年5月23日・24日に、与島PAにおいて、「せとうち島旅フェス2026～島々と学び未来へつなぐ～」を開催しました。島旅フェスは2022年に始まり、5回目を迎えました。

ステージイベント、せとうちマルシェ、インフラツアー、はたらく船展、島旅クルーズなど島港や周辺の島々へと舞台を広げながら、瀬戸内の島々や地域の自然、文化、人の魅力に触れられる初夏の催しとして少しずつ定着してきており、瀬戸内の魅力を未来へつなぐ催しとして取り組んでいます。



北木島クルーズ
石切りの溪谷展望台

まるぼオブジェ1周年イベント@大浜PA（下り）

2024年夏に、因島出身の有名ミュージシャンのメジャーデビュー25周年を記念した官民連携・地域一体型のイベント「島ごとぼるの展」の開催記念モニュメントを、しまなみ海道の大浜PA（下り）に2025年3月に設置しました。1周年イベントとして、2026年3月からモニュメントに設置した二次元コードをスマートフォンで読み取るとコラボイラストが出現するAR体験企画を行っており、商工会議所など地域団体と連携したイベントを継続的に実施し、モニュメントの認知度向上を図ることで、因島・しまなみ海道を訪れるきっかけとなり、地域の新たな観光スポットとして親しまれ、地域の更なる活性化につなげていきたいと思っています。



本四バス開発（株）
料理飲食事業部長
村上 恭嗣

インフラツアーの更なる推進

JB本四高速グループは、長大橋という貴重な資産を有効活用し、高速道路事業への理解を深めるとともに、橋梁技術への関心を高めていただくことを目的として、2005年に明石海峡大橋「ブリッジワールド」を開始しました。

さらに、瀬戸大橋「スカイツアー」や来島海峡大橋「くるくるクライム」などの塔頂体験ツアー、沿線自治体と連携した特別企画などを展開し、インフラツアーのリーディングカンパニーとして、その魅力を積極的に発信しています。

当社グループが手掛ける3つのインフラツアー



明石海峡大橋塔頂体験 「ブリッジワールド」

開始時期：2005年

橋の建設に携わった方を中心としたツアーリーダーが、世界最大級の橋の建設について、知られざる橋の技術や歴史などを分かりやすく楽しく説明。普段立ち入ることができない管理用通路を通り、海面上約300mの塔頂から360°のパノラマが楽しめる、感動の体験ツアーです。

「ブリッジワールド」
について
詳しくはこちら

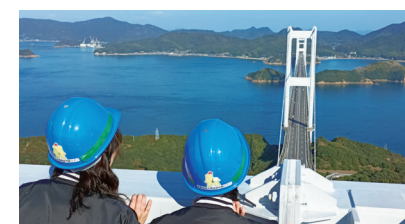


瀬戸大橋塔頂体験 「スカイツアー」

開始時期：2019年

ツアー専用ガイドが瀬戸大橋の建設技術や歴史などを説明しながら、JR瀬戸大橋線の車両が間近で見られる管理用通路や、海面から175mの塔頂に案内するツアーです。途中で側を通過する列車や塔頂から見る風景はまさに絶景です。以前はイベント時に無料にて実施していましたが、2019年より常設化されました。

「スカイツアー」
について
詳しくはこちら



来島海峡大橋塔頂体験 「くるくるクライム」

開始時期：2025年

2020年、国土交通省の「インフラツーリズム魅力倍增プロジェクト」モデル地区選定で実現した「来島海峡大橋塔頂体験」。安全対策強化と改良を重ね、2023年から現在の形態となりました。2025年からは「くるくるクライム」として進化。塔頂からの絶景と急流を楽しむ遊覧船を体験できるツアーです。

「くるくるクライム」
について
詳しくはこちら



TOPICS

第50回 橋の科学館講演会「ブリッジワールド20周年記念～明石海峡大橋塔頂体験の魅力～」を開催しました！！

ブリッジワールド開設20周年の節目として、明石海峡大橋塔頂体験の魅力を紹介する講演会を開催しました。

当日はツアーリーダーによるトークセッションを通じて、明石海峡大橋の技術やブリッジワールドの意義を分かりやすく発信。実際のエピソードを交えた内容に、参加者からは高い評価と関心が寄せられました。



感動の空中散歩を楽しもう！

ブリッジワールドでは、お客様に驚きと感動を味わっていただきたいという想いを持ってご案内しています。スケール感を楽しむだけでなく、橋をより身近なものと感じていただきたいと考えています。また、橋の歴史や橋を支える技術について、分かりやすく、楽しみながら学んでいただけるよう説明しています。兵庫県内に限らず全国各地からご参加いただき、近年では海外からのお客様も増えてきています。今後も、橋の壮大さや美しさに加え、架橋・保守を支える高度な技術力を広く伝えるツアーを目指していきます。

明石海峡大橋塔頂体験「ブリッジワールド」
ツアーリーダー 井坂 寿夫





せとうち美術館ネットワークの深化・発展

瀬戸内地域の文化芸術振興による活性化とブランド力向上を目的として、瀬戸内地域に点在する美術館・博物館をネットワーク化し、2008年に「せとうち美術館ネットワーク」を発足しました。現在ではネットワーク間ミーティングやさまざまな情報発信などを通じて、関係施設の連携を含め、文化・芸術面から瀬戸内地域の活性化に貢献しています。

18年で6施設から92施設へ

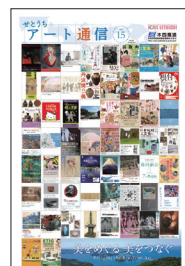
2008年の発足当初、4県6施設からスタートしましたが、現在では10県92施設の美術館・博物館を結ぶまでに拡大しています。

多様な取組

参加施設が一堂に会する「せとうち美術館サミット」、地域ごとに開催する「地域懇談会」などを通じて、連携を強化しています。

また、「せとうちアート通信」や「せとうち美術館ネットワークパスポート」の発行、デジタルスタンプラリーを開催しています。

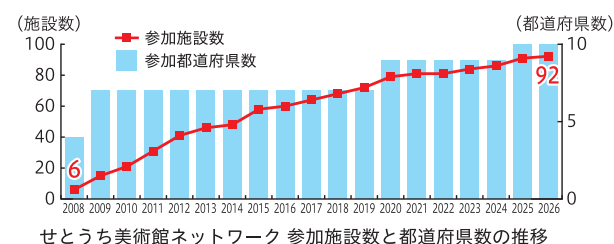
さらに子どもたちが美術やアートに親しむきっかけとなる「橋を渡って親子でアート鑑賞」ツアーなど、多彩な取組で地域の文化振興に貢献し、ネットワークの更なる拡大とブランド価値の向上を目指しています。



せとうちアート通信



せとうち美術館ネットワークパスポート



TOPICS

せとうちアート通信とは

せとうち美術館ネットワーク参加施設の展覧会・イベント情報を発信するフリーペーパーです。年4回、各号4万部を発行し、瀬戸内地域を中心に関東地域を含む約450か所で配布しています。2022年には「日本地域情報コンテンツ大賞2022 タブロイド部門 最優秀賞」を受賞しました。

せとうち美術館ネットワーク全館制覇について

「せとうちアート通信」「せとうち美術館ネットワークパスポート」の発行、各種イベントを通して参加施設間の周遊促進に取り組んでいますが、2024年度には、せとうち美術館ネットワーク参加施設(当時86施設)をすべて巡り、全館制覇した方が3名誕生しました。



せとうち美術館
ネットワーク
について
詳しくはこちら



サイクリングによる地域振興

広域連携によるサイクリング振興を通じて、瀬戸内地域のブランド価値向上と持続的な地域活性化を推進しています。ナショナルサイクリングルート「しまなみ海道サイクリングロード」における自治体との連携をはじめ、国、地方公共団体、経済団体、広域DMO等90団体で構成するSetouchi Vélo協議会の事務局として、サイクリングルートのネットワーク化、サイクリングの推進エリア化、国内外への情報発信に取り組んでいます。

ナショナルサイクリングルート「しまなみ海道サイクリングロード」の取組

2014年から実施している「しまなみサイクリングフリー」による自転車利用環境の向上や、2年に一度開催される日本最大規模の国際サイクリング大会「サイクリングしまなみ」の開催支援(2026年10月開催予定)を通じて、交流人口の拡大と地域振興に貢献しています。



サイクリングしまなみ2024の開催状況

Setouchi Vélo協議会



当協議会は、瀬戸内地域やその周辺地域を環境に配慮した世界にも認められる「サイクリング推進エリア」に育てることにより、瀬戸内地域等のブランド価値の向上を図り、持続的な地域振興を実現することを目的として、活動しています。

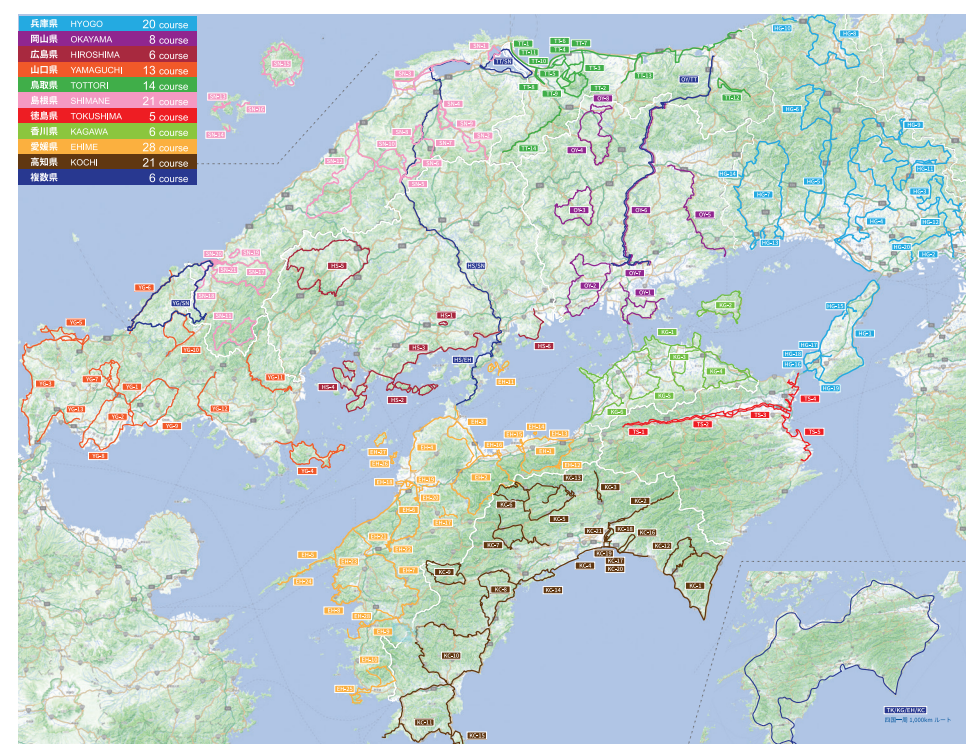
当社は事務局として、瀬戸内地域等に存在する多様なサイクリングルートの「Setouchi Véloルート」登録、市町村ミーティングやルート調査を通じた地域課題の共有、「シェア・ザ・ロード」の普及活動などに取り組んでいます。

サイクリングで地域をつなぐ 強固なハブを目指して

私は会長県である岡山県の担当者として、事務局の本州四国連絡高速道路株式会社と緊密に連携しながら、サイクリングを通じた観光振興に取り組んでいます。広域での合意形成など、時に難しさを感じることもありますが、地域間連携の中での機運醸成やイベント来場者の反響を肌で感じられることに大きなやりがいがあります。今後も強固な連携のハブとして、サイクリングを通じた地域の活性化に取り組んでまいります。



岡山県 産業労働部
観光課
西村 美紅



Setouchi Véloサイクリングコース



Setouchi Vélo協議会岡山会議(総会)
(89団体：2026年5月末時点)

Setouchi Vélo
協議会について
詳しくはこちら



地域への想いを力に、 地域を未来に「つなぐ」



多田 智貴 Tada Tomoki
2026年度入社 香川県出身

寺田 真綾 Terada Maaya
2025年度入社 兵庫県出身

浅井 鉄平 Asai Teppei
2023年度入社 大阪府出身

飯塚 悠仁 Iizuka Yujin
2024年度入社 青森県出身

地域連携への思いが、仕事の原動力

浅井 私は入社4年目ですが、昨年7月に地域連携部に異動してきました。もともと大学で観光を学んで瀬戸内の魅力と課題を感じていた中で、JB本四高速の地域連携事業を知り、ぜひ携わりたいと感じて入社した経緯があったので、意欲に燃えています。皆さんも地域連携が入社動機でしたか？

寺田 はい。私も観光が趣味で、何度も瀬戸内に訪れていましたが、魅力がうまく伝わっていないと感じていました。そんな中で、地域に根ざして活動できる企業で働きたいと思っていたところ、JB本四高速の存在を知りました。高速道路の維持管理だけでなく、地域をつなぐ役割を担っていることを知り、志望度がぐんと高まりましたね。

多田 私は大学時代に地元香川で防災を学び、地域に入り込みながら活動する中で、地域課題の解決に関わる仕事をしたいと考えるようになりました。大学院で学ぶために上京しましたが、やはり瀬戸内に戻って地域のために働きたい思いが強かったことが志望動機のひとつです。また業種や企業を絞るにあたっては、イン

フラ企業の安定性に加えて、JB本四高速は地域連携という挑戦的な取組ができる点で他社以上の魅力を感じました。

飯塚 安定性に加え、公共性の高い仕事ができる

点はインフラ企業の大きな魅力ですね。

浅井 なかでも特に交通関連のインフラ企業は、沿線の魅力開発や交流人口を増やす取組が特徴的で、地域に携わりたい人には理想的です。

飯塚 私は青森県出身で、JB本四高速のことは漠然とした知識しかありませんでしたが、瀬戸内を旅行した際に文化の違いに惹かれ、この地域で働きたいと思いました。また、公共性の高いインフラ企業でありながら、独自の地域連携の取組を打ち出す当社に魅力を感じました。内定をいただいた企業は他にもありましたが、選考時に対応いただいた先輩社員の人柄に惹かれたことが入社の決め手の一つです。

寺田 私もインターンシップに参加した際、先輩に「うちにおいでよ」と声をかけられたことが大きかったです。また若手の意見をしっかり採り入れる会社だとも伺って、当社で働きたい思いが強くなりました。

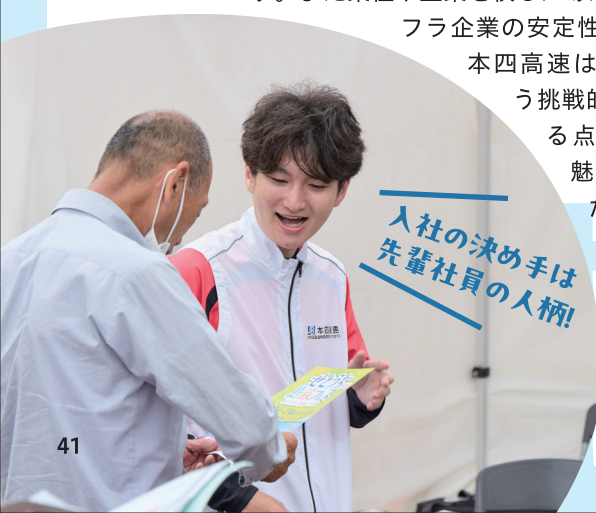
浅井 今回開催した「せとうち島旅フェス」の企画運営も然り、年齢問わず仕事を任せてもらえて、若手が活躍できる会社なのは間違いないですね。また一方で、上司や先輩のしっかりとしたバックアップもとても心強いです。

寺田 ところで、私は面接の際に特別「地域連携部」への配属を希望したわけではなかったのですが、皆さんはいかがでしたか？

飯塚 私は希望しました。

多田 私もです。

「うちにおいでよ」の一言に惹かれました



入社の決め手は先輩社員の人柄！



浅井 私は希望していたわけではありませんでした。最初はしまなみ今治管理センターに配属され、通行止め時のお客様応対も経験しました。地域連携にも興味はありましたが、やはり現場でのインフラ管理が当社の根幹なので、そこでの経験はとても貴重でした。

飯塚 私も今後、コーポレート部門や管理部門の仕事をしたいです。その時は、この地域連携部で培ったマインドや、多様なステークホルダーとの調整といった経験を活かして、会社全体へと貢献したいです。

多田 現場を知ることは大事ですし、私も色々な部署を経験したいです。でもやはり入社の決め手が地域連携に携われる企業、という点だったので、その軸はこの先もぶれないと考えています。

寺田 地域をつなぐ使命は、他の部署でも同じ。会社全体で共通する基礎の部分が「地域連携」だと思っていますので、今後、どの部署で働くことになっても、地域連携がしたいという思いは活かせるのではないのでしょうか。

「巻き込み力」を発揮して、 未来を創造する

浅井 さて、地域連携部が携わる最も大きなイベントが、この5月に開催した「せとうち島旅フェス」です。

飯塚 浅井さんをリーダーに、このイベントの仕事に従事した経験の長い私がアドバイスや契約面をサポートして、寺田さん、多田さんの2名にもイベントに関するさまざまな業務をサポートいただきました。1年前の開催直後から準備を始めて、企画構想、現地視察や関係機関との打合せも順次進めていきましたね。

多田 私は新入社員として初めての参加でしたが、新たな取組も多かったと聞いています。

寺田 これまで連携を重ねてきた香川県丸亀市の本島とさぬき広島に加えて、今回は初めて、牛島や岡山県笠岡市の北木島とも「島旅クルーズ」でつながりました。特に牛島では親子参加型の清掃ツアーを実施しました。

飯塚 2022年にスタートしたこのイベントですが、最初のコンセプトは瀬戸内地域の方々が与島に集い、それぞれの地域の文化や魅力を発表する場という内容でした。しかし、今では瀬戸内の島々を実際に訪れて学ぶ「体験型・周遊型イベント」に発展しつつあります。また、近年はサステナビリティをテーマに、学びや交流の発信にも注力しており、コンテンツもステークホルダーも、回を重ねるごとに増えてきました。

浅井 4人で分担して調整に当たる関係者や関係団体は、自治体に観光協会、島の関係者、企業など多岐にわたり、合計して40程にもなるのでしょうか。

飯塚 そのステークホルダーも、以前は各所からの紹介が主体でしたが、現在はマルシェの出店者さんなど、私たちからコンタクトを取って企画趣旨に賛同いただいて、巻き込む相手先が多くなりましたね。

多田 当日は与島港に想像以上に多くのお客様が来場され、とても賑わっていました。ステージイベントも終始

活気にあふれ、
その中で会社としてイベントを盛り上げる
お手伝いができたことは貴重な
経験になりました。

寺田 私も、多くのお客様がステージに入っている様子を見て感動しました。今回は早い時期から多岐に渡るプロモーションを行っていた成果もあり、前回と比較して人の集まり方が段違いでしたね。手応えを感じましたし、今後さらに来場者数を増やす施策も検討できそうです。

飯塚 今回の「せとうち島旅フェス」が高速道路の利用促進にも寄与できたことが、交通量や与島PAでの売上げといった数値に出ています。また、このイベントとしては初めて、当社の旅行商品として打ち出した「島旅クルーズ」も、事前募集の段階で満席、キャンセル待ちになるほどの盛況ぶりです。お客様に地域の魅力を再発見していただけたのではないのでしょうか。

多田 またすぐ来年度の「せとうち島旅フェス」の準備が始まりますね。

寺田 今回は清掃ツアーという新たな企画も取り入れることができたので、サステナビリティに関する要素をさらに増やしたいと考えています。

浅井 「せとうち島旅フェス」のサブタイトルは「島々と学び、未来へつなぐ」。清掃ツアーに参加した子どもたちが、目の当たりにした漂着物や廃屋から、環境問題や人口流出の問題について学んで、島や未来について考えるきっかけになれば嬉しいですね。将来的には、その子どもたちが瀬戸内の島々に関わる場所までつながると理想的です。

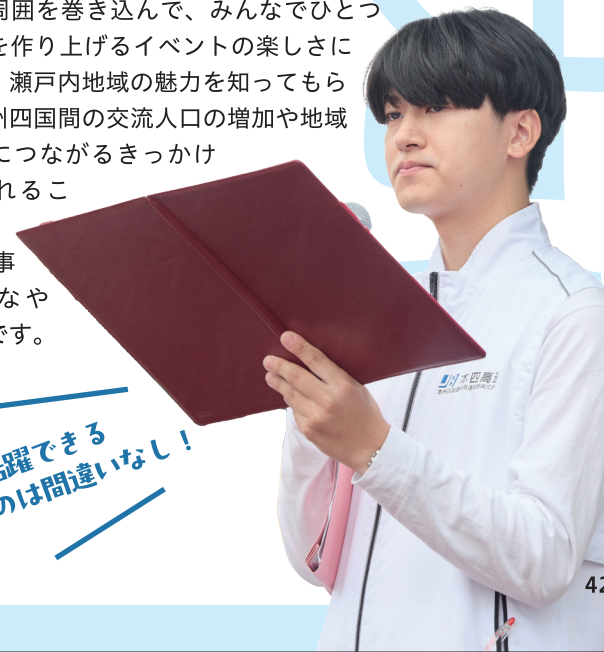
飯塚 「島旅クルーズ」のような旅行商品にも、さらに磨きをかけたいです。今回のイベントを糧にして、地域連携に、交流人口増に、それから今後の当社の収入源のひとつとしても、幅広く貢献できる可能性が秘められていると再確認できました。今後、会社全体で取り組んで盛り上げていきたいです。

浅井 周囲を巻き込んで、みんなでひとつのものを作り上げるイベントの楽しさに限らず、瀬戸内地域の魅力を知ってもらい、本州四国間の交流人口の増加や地域の未来につながるきっかけをつくれることが、この仕事の大きなやりがいです。

若手が活躍できる
会社なのは間違いなし！



地域連携という
挑戦的な取組が
魅力です





インタビュー [沿線自治体]

「命と経済をつなぐ」瀬戸大橋と これからも、ともに未来を描きたい

西尾 徹
Nishio Toru
香川県 交流推進部長

観光・県産品の振興や地域公共交通、航空路線、交流人口の拡大などを担う香川県交流推進部の西尾部長に、新たな交流拠点を核に活気を増す香川県の現在と、瀬戸内地域の未来に向けた取組、JB本四高速や道路インフラへの期待について伺いました。

新たな魅力で活気づく香川

県内外への発信力を強化

香川県は、古くから四国の玄関口として発展し、1988年の瀬戸大橋開通で人流や物流が飛躍的に増加しました。「うどん県」としての知名度や、栗林公園・金刀比羅宮・屋島など歴史ある観光地だけでなく、近年は瀬戸内国際芸術祭に代表される現代アート、父母ヶ浜や小豆島オリブ公園など、集客力の高いスポットにも恵まれ、東アジアとの充実した国際線ネットワークを有する高松空港を利用して、多くの外国人観光客にもお越しいただいています。

こうした条件を活かし、さらなる賑わいの拡大に向け、食・自然・文化・アートを組み合わせた滞在・周遊型観光を推進しています。特に、2025年2月に完成した香川県立アリーナ（あなぶきアリーナ香川）は、高い集客機能に加え、ユネスコの「世界で最も美しいアリーナ2025」にも選出されるなど、多くの人を惹きつける観光拠点です。これを核に、夜型観光による香川での滞在を促進しようと、2025年度にプロジェクトマッピングやクリスマスマーケットを実施し、延べ50万人の来場と約40億円の経済効果を推計しました。

また、2026年3月には、県内初となるフルマラソン大会「かがわマラソン」を開催し、約1万人のランナーが、沿道に駆けつけた約10万人の応援を背に、讃岐路を駆け抜けました。

さらに、高松地区の賑わいを県内各地に広く波及させるため、高松駅周辺を発着地とし、東讃エリアや中西讃エリアを周遊するツアーの開発に向け、市町と連携し「『瀬戸の玄関口』から始まる香川ぐるっと周遊プロジェクト」に取り組んでいます。

このほか、大都市圏での情報発信にも力を入れており、明治神宮野球場でプロ野球の「うどん県ナイター」を開催するなど、ユニークな取組にも挑戦しています。

高速交通網の充実も視野に

連携を深めて、ともに未来へ

県の面積は全国最小ですが、製造業や食品関連産業、農林水産業が盛んで、クオリティの高いものづくりやニッチな分野に強い香川県にとって、瀬戸大橋は

本州と四国を結ぶ大動脈であり、地域の発展を支える基幹インフラです。日常の物流を支えるだけでなく、災害時には緊急輸送路としての重要性も高く、香川県にとって、まさに「命と経済をつなぐ橋」です。

また、橋を渡ることにより、瀬戸内海の美しい島々を眺望できることが旅の魅力であり、橋そのものが重要な観光資源となっています。

一方で、次世代に向けての重要課題は、道路鉄道併用橋の先見性を活かした四国の新幹線による高速交通網の確立です。基本計画に位置付けられてから半世紀以上にわたり具体的な進展がありませんでしたが、2026年8月には国においてケーススタディ調査の公示が行われ、前進に向けた第一歩が踏み出されたものと、大きな期待を寄せています。

JB本四高速と香川県は、さまざまな形で地域連携を進めています。

観光面では、広域観光型サイクリングを推進するため、Setouchi Vélo協議会において、中四国各県が連携して取り組んでいます。現在、大鳴門橋で自転車道の整備が進められていると伺っており、今後はより一層サイクリング観光をPRしていく必要があると考えています。また、与島を舞台とする「せとうち島旅フェス」や「せとうちバイクフェスタ」は、観光や地域の情報発信に寄与する重要なイベントであり、JB本四高速には、今後もハード資源である瀬戸大橋とソフト資源である周遊観光を組み合わせ、瀬戸内の魅力発信における中心的な役割を期待しています。

交通・物流面では、2026年3月に坂出北インターチェンジがフルインター化し、県が進めてきた県道の4車線化と相まって、坂出港や県内最大の工業団地である番の州臨海工業団地の利便性が向上し、県内の産業に大きな効果をもたらしています。引き続き、地域のニーズに応じて物流効率化と地域経済の活性化をさらに後押ししていただきたいと思います。

2028年には瀬戸大橋開通40周年という大きな節目が控えています。今後もJB本四高速と観光・産業面で一層連携を深め、ともに瀬戸大橋と瀬戸内地域を盛り上げていきたいと考えています。



インタビュー [美術館]

観光の核から未来の拠点へ。 ミュージアムの進化と共創のカタチ

佐藤 晃司
Sato Koji
大和ミュージアム・入船山記念館「みらい20」統括責任者

「せとうち美術館ネットワーク」の一員であり、呉市随一の観光拠点でもある大和ミュージアム。その現在と未来について、佐藤統括責任者にお話を伺いました。

歴史・技術・平和への思索を巡らせ、

未来へと発展させる科学博物館

私は、大和ミュージアム・入船山記念館「みらい20」（以下「みらい20」という。）の統括責任者として、2026年4月から大和ミュージアムと入船山記念館の施設運営に携わっています。

大和ミュージアムがある呉市は、かつて「東洋一の軍港」と謳われ、軍直属の巨大造船所である海軍工廠（かいぐんこうしょう）を擁する街として発展しました。大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）は、そうした呉の歴史と技術、そして平和の重要性を伝えるべく、この地で建造された戦艦大和をテーマに2005年に開館した科学博物館です。2025年には大規模リニューアルを実施し、航空機部品をはじめ呉の多様なものづくりを紹介する展示や、体験型展示の拡充を図りました。当館の展示資料には、全長263mあった戦艦大和の10分の1模型を含めたすべてに、事実に基づくキャプションのみを付しています。これは、来館者に自由な思索と解釈を促すという開館当初からの基本理念によるものです。今回の大規模リニューアルもまた、歴史や技術、平和について、皆様が新たな角度から見直す契機となることを期待しています。

大和ミュージアムは、年間来館者数が70万人を超えるなど、呉市観光の軸です。私たちはこの観光資源を最大限活用し、当館を目的に来呉した皆様が、館内のみで完結せず市内を周遊する仕組みづくりに取り組んでいます。また新たな客層の取り込みにも注力し、2026年8月には「大和ナイトミュージアム」や「レゴ®ブロックで作る大和の世界」といったイベントを開催しました。前者は光と映像を用いた演出で、比較的若い世代やインパウンドのお客様に多く来館いただきましたし、後者は、レゴ®ブロックで作った戦艦大和と艦船のパノラマ展示や、親子ワークショップが盛況を博しました。今後も多様な企画と展示で、幅広いお客様に愛される施設を目指してまいります。

「せとうち美術館ネットワーク」を通じた

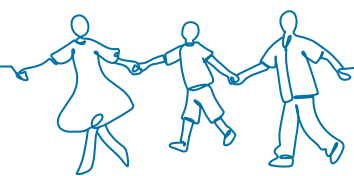
施設間交流への期待

大和ミュージアムが、JB本四高速の展開する「せとうち美術館ネットワーク」に加入したのは2014年10月です。以来、年に1度開催される「せとうち美術

館サミット」への参加はもとより、地域懇談会への出席、『せとうちアート通信』ほか情報誌への記事掲載など、さまざまな形で活動に参画しています。また、ネットワーク加盟施設が掲載されたパスポートの配架も行っていますが、私自身もこの冊子を読むことで、瀬戸内地域にこれほど多くのミュージアムが存在することを初めて知りました。みらい20は今年度から当館の運営管理に携わり始めたばかりです。展示や調査研究に携わる学芸員の方々は呉市の所管であるため、従前の体制を維持しているものの、施設運営チームである我々はまだ業界経験が浅く、他館との連携体制が課題のひとつとなっています。こうした状況下、ネットワークを通じて加盟施設同士のつながりを得られることは、施設運営の知見を得るうえでも非常にありがたいと感じているところです。

これからサミットへの参加も楽しみにしており、運営上の課題を共有できる場になればと考えています。現状では、運営チームか、学芸員かといった参加者の立場は特に限定されていないようなので、将来的には、同じ立場、視点を持つ者同士で集まる機会を設けることができれば、より実効性の高い場になるのではないのでしょうか。ゆくゆくは運営チーム間の交流を深め、イベントの共同開催や相互送客など、相乗効果によって施設および地域全体の活性化につなげられることを期待しています。





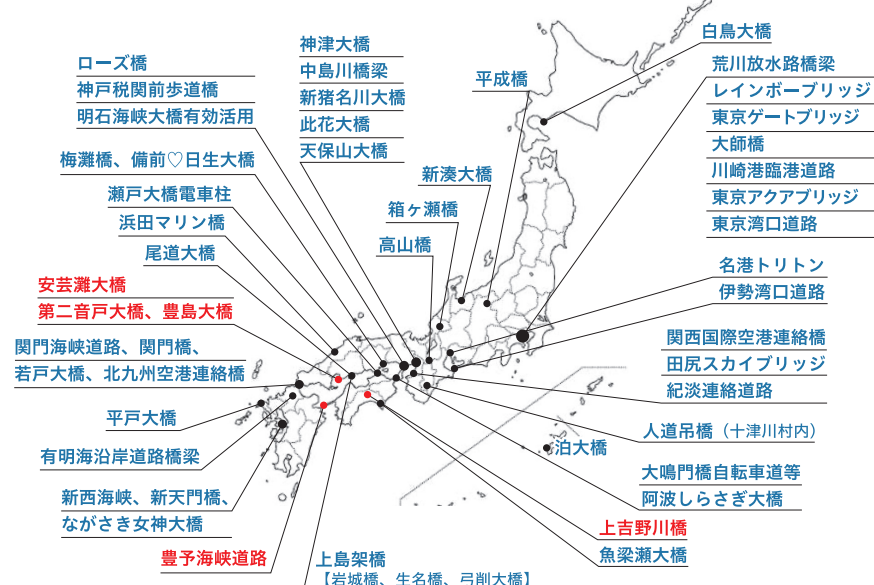
国内外での橋梁の技術的課題の解決

橋梁技術コンサルティング事業などによる 技術支援の拡大

国内外のインフラ老朽化や技術者不足に対応するため、本四公団時代から培ってきた橋梁の建設・維持管理技術を活用し、技術コンサルティング業務を拡大します。また、技術者育成事業を拡充するとともに、長大橋の維持管理技術で培った技術の外販を拡大します。2025年度は、計14件の技術支援を実施し、目標の9件を大幅に達成しました。これは、長大橋に関する技術力や実績を活かした営業活動・技術広報活動が受注拡大につながったことによるものです。

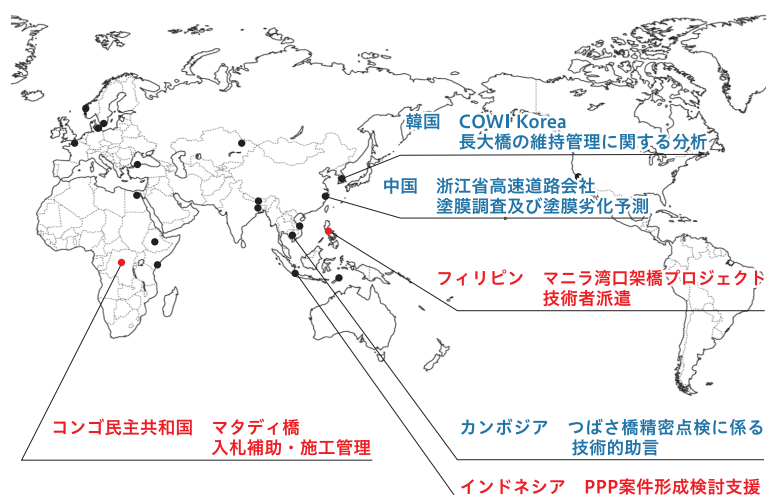
国内技術協力の主な実績

赤字：2026年度（予定を含む）
青字：2005年度～2025年度 ※グループ会社も含む



海外技術協力の主な実績

赤字：2026年度（予定を含む）
青字：2005年度～2025年度



長大橋技術支援 実施件数

14件
(2025年度)
※グループ会社も含む

取組事例



維持修繕等に係る技術協力 （広島県呉市：安芸灘大橋）

安芸灘大橋に備え付けてある桁外面作業車や橋体等の保守点検、橋梁保全工事を受託



技術コンサルティング （中国浙江省：西堠門大橋）

鋼構造物の塗膜調査及び塗膜劣化予測に関する技術支援として、塗膜管理要領の作成支援や現地での調査トレーニング等を実施

技術継承・育成・ネットワーク構築などに関する取組

管理者等とのネットワーク深化によるプレゼンス向上

国内外への技術支援を拡大するため、長大橋に関する情報収集・発信の積み重ねや専門家・関係機関との連携強化によりネットワークを深め、長大橋技術集団としての存在感を高めます。



国際吊橋造橋管理者会議



長大橋管理連絡会議



本四技報・長大橋ニュースレター



技術展における技術情報発信

長大橋技術支援人材の保有

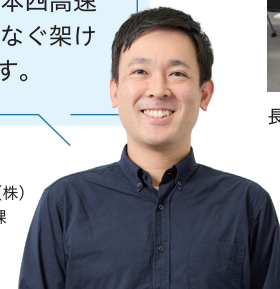
資格の取得支援や客観的に評価する資格制度の確立に取り組みながら、技術支援実績を積み重ね、国内外の橋梁の技術的課題の解決を実施し続けられる体制を整備します。2025年度は、資格取得支援や技術者育成の取組により、若手の長大橋技術支援人材を2名確保し、保有数は計28人となりました。

長大橋技術支援 人材保有数

28人
(2025年度)
※グループ会社も含む

技術をつなぐ、管理者をつなぐ

JB本四高速では国際学会や技術セミナー等を通じて、国内外の長大橋管理者と維持管理の技術課題や解決策について情報共有し、協力関係の構築や技術的知見の蓄積に取り組んでいます。JB本四高速のノウハウを活かした技術支援はもちろん、蓄積したJB本四高速以外の知見も活かし、さまざまな管理者をつなぐ架け橋のような技術支援に取り組んでいきたいです。



本州四国連絡高速道路（株）
長大橋技術部 技術総括課
香川 耀平



長大橋技術検定講習会



インタビュー「国内研究機関」

長大橋技術のアップデートと、道路アセットマネジメントで社会貢献を

玉越 隆史

Tamakoshi Takashi

国土交通省 国土技術政策総合研究所
企画部国際研究推進室 主任研究官

本四架橋の建設・維持管理で培った技術と知見のアップデートと、海峡部横断・連絡道路網のインフラアセットマネジメントの実践を通じて、JB本四高速が社会に果たすべき役割について、国土技術政策総合研究所の玉越主任研究官に伺いました。

今日の道路橋設計基準を、

国と共に築き進化させてきた存在

私は1991年に本州四国連絡橋公団（以下「公団」）に入庁し、尾道・今治ルートの建設工事等に携わった後、当時の建設省土木研究所に出向した後、国土交通省に転籍しました。その後は3年間の京都大学出向を除き土木研究所と国土技術政策総合研究所（以下「国総研」）で道路構造物に関する国の技術基準に関連する研究や基準づくりに取り組んできました。

長年、JB本四高速グループに内外から関わってきた立場から、その企業価値や期待される役割について私の考えをお話しさせていただきます。

JB本四高速は、公団時代から国とともに道路橋の技術基準である道路橋示方書（以下「道示」）の策定を担ってきた組織です。道示の適用標準を超える長大橋群の建設にあたっては、その実現のために当時の最先端技術を導入しつつ国が求める橋の性能を満足できるよう国とともに技術基準類を整備しています。本四架橋の完成後も全国に適用される道示は性能規定型基準への転換や、耐震性能の強化、疲労設計の導入、部分係数設計体系への移行など、最新の知見と社会ニーズの変化を反映して、改定が繰り返されてきています。この間も、JB本四高速は社員を国総研や土木研究所に出向させて、道示をはじめとする技術基準類の改定に必要な調査研究を担うなど、重要な役割を果たしてきたことは周知のとおりです。このことは、関連する国などの研究報告書の執筆者、基準検討委員会の委員、基準解説書の執筆者などの名簿からもわかります。

長大橋に関する知見とデータを活用した

技術基準類のアップデートを

JB本四高速は、高速道路株式会社法において、国、地方公共団体等の委託に基づき長大橋の建設、調査、設計、試験、研究等が実施できる組織とされています。そして、建設当時から現在に至るまでの国内外の長大橋関連技術の情報や本四道路の維持管理データを蓄積しているだけでなく、道示をはじめとする橋梁関係の技術基準について組織的に把握してきています。

その結果、JB本四高速は、過去に整備された長大橋関連の技術基準類を、維持管理の実践経験も踏まえてアップデートして社会還元できる唯一の組織になっており、産官学とも連携してその実現に中心的役割を果たすこと

が期待されているのではないのでしょうか。

3ルート完成後、技術基準も橋の技術も飛躍的に進化しています。その中で、JB本四高速は長大橋群の維持管理の実践から膨大なノウハウとデータを得てきています。例えば、今、最新の知見と技術で本四架橋を建設し直すとすれば、どんな橋になるのでしょうか。その最適解が導き出せるのは、本四架橋の計画から建設・維持管理に至るまでの全プロセスと過去から現在までの橋の技術基準を熟知し、かつ30年間以上も長大橋群の維持管理を実践してきたJB本四高速だけなのかもしれません。

JB本四高速は、2025年度には、国総研や地方整備局との連携で公開技術セミナーを開催するなど、技術の社会還元も行っていますし、本四架橋時に整備された技術基準類を最新の道示に整合させる作業も既に始めていると伺っています。日本の橋梁技術の維持・向上に資する取組ですし、このようなJB本四高速ならではの社会貢献の取組の推進は、社会的にも大いに期待されているのではないかと感じています。

「道路インフラアセットマネジメント」の

実践フィールドで社会貢献

JB本四高速が一元的に管理する本州と四国を連絡する3ルートの道路ネットワークが広がる地域は、自然環境や産業構造、道路の利用形態など極めてバラエティに富んでおり、他に類を見ない「道路インフラアセットマネジメント」の壮大かつ貴重な実践フィールドです。橋梁技術のみならず、経済や観光、防災など多岐にわたる道路ネットワークの価値を明らかにするなど道路インフラアセットマネジメント技術でもJB本四高速の貢献が期待されるミッションがあると思います。

そして、得られたノウハウやアップデートした技術的知見を発信して社会還元することも日本全体の道路インフラアセットマネジメントの発展には期待されています。これまでの社員の皆さんの努力によって、JB本四高速が行う道路の維持管理水準や交通サービスの品質は高く評価されていると感じています。そして国土強靱化の実現が求められる今、JB本四高速には、過去から得てきたノウハウや技術を最新の知見で再評価し、日本の橋梁技術、道路インフラアセットマネジメント技術の革新に必要な新たな知見を生み出すという、真の意味での「温故知新」にグループ全体で取り組み、ますます社会に貢献されることを期待しています。



インタビュー「海外事業パートナー」

本四連絡橋を守り続けた経験が、世界のインフラの未来をつくる

小西 知行

Konishi Tomoyuki

（株）オリエンタルコンサルタンツグローバル
執行役員 道路交通事業部長

アジア・アフリカを中心に数多くの橋梁プロジェクトに携わってきたオリエンタルコンサルタンツグローバル。海外インフラ整備の最前線に立つ小西執行役員に、JB本四高速グループの価値と今後への期待について伺いました。

日本の橋梁技術を世界展開する、

戦略的なパートナー

私は橋梁技術者として約25年にわたり海外インフラ事業に携わり、これまでアジアやアフリカ諸国などで道路・橋梁プロジェクトに従事してきました。近年強く感じているのは、橋梁は「つくること」だけでなく、「使い続けること」が重要な時代になっているということです。海外でも長大橋建設のニーズは依然として高く、とりわけ島しょ国や大規模河川を抱える国々では新設橋梁への需要が拡大しています。一方で、維持管理や人材育成、アセットマネジメントに関する課題が顕在化しています。

そのような中で、JB本四高速グループは極めて大きな価値を持つ存在だと考えています。同社は世界有数の長大橋群を建設しただけでなく、それらを長年にわたり健全な状態で維持管理してきました。点検や補修の技術はもちろん、組織体制の構築や予算管理、人材育成を含めた実践的なアセットマネジメントの知見は、世界的にも極めて貴重です。特に、何十年にもわたり長大橋群を管理し続けてきた実績は、海外の橋梁管理者にとって大きな説得力を持っています。

私はJB本四高速との協業を、単なる案件単位の協力関係ではなく、「日本の橋梁技術を世界展開する戦略的なパートナー」だと捉えています。私たちが持つ海外ネットワークや案件形成のノウハウと、JB本四高速グループが持つ長大橋の維持管理技術や実践知を組み合わせることで、海外インフラが抱える課題解決への更なる貢献が期待できます。

そして、本州四国連絡橋公団やJB本四高速のOBの方々にもこれまで当社の技術者として活躍いただいており、現在も当社で実施中の海外プロジェクトにおいて重要な役割を担っていただいています。高度な橋梁技術はもちろん、インフラ管理者として長期的な視点で橋梁を捉える考え方は、コンサルタントだけでは得難いものです。実際に長大橋の維持管理に携わってきた経験そのものが、海外での技術移転や人材育成に大きな力を発揮しています。

維持管理で培った知見が、

次世代の橋づくりにつながる

現在、当社とJB本四高速がJVを組んで参画しているフィリピンのバターナーカビテ連絡橋建設事業をはじめ

め、海外では長大橋建設と維持管理の両面でニーズが高まっています。

海外では点検や補修の技術が徐々に普及してきている一方で、予算確保や組織運営を含めた維持管理体制の構築は依然として大きな課題となっています。長大橋を持続的に管理していくためには、技術だけでなく、それを支える制度や組織、人材育成まで含めた総合的なマネジメントが不可欠です。その意味でも、JB本四高速グループが長年にわたり実践してきたアセットマネジメントの経験は、海外において極めて大きな価値を持つと考えています。

さらに、JB本四高速グループの強みは維持管理に留まりません。長年にわたり長大橋群を維持管理してきたからこそ、「将来どのような維持管理が必要になるのか」「長寿命化のために設計段階で何を考慮すべきか」といった視点を設計や建設へフィードバックできます。維持管理によって得られた知見が、次の橋づくりに活かされる。この循環こそが、JB本四高速グループの大きな強みです。世界でも類を見ない長大橋群をマネジメントしてきた経験は、JB本四高速グループならではの貴重な資産です。

その知見を国内だけに留めることなく、海外のインフラ整備や人材育成へ積極的に展開し、社会へ還元していくことが、JB本四高速グループの次なる価値創造につながると考えています。JB本四高速グループが長年培ってきた知見は、世界のインフラの持続可能性向上に貢献できる大きな可能性を秘めています。今後もJB本四高速グループとともに、その価値を世界へ広げ、日本の橋梁技術と維持管理の知見を海外へ発信していただきたいと考えています。

